

総則部会

<県研究主題>

学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案 1

提案者 大窪 和雄 (湘南三浦地区)

<研究主題> 「かながわ j o y ! j o y ! スクール健康・体力づくり実践研究」の取り組み

1 提案内容

(1) テーマ設定の理由

5年前生徒指導面で緊急保護者会が開かれ、全職員が一丸となって、学習指導及び生徒指導の充実に取り組んできた。年を重ねるごとに少しずつ立ち直りをみせてきた。23年度にはそれらの活動が功を奏し、全体的な授業への取り組みがよくなり委員会活動や部活動への参加も積極的になり、比較的落ち着いた学校に生まれ変わった。

しかし、「授業への集中力が欠如している生徒」「無気力な生徒」「体育の授業を見学する生徒」等の問題が残っていた。それまでの3年間は、主に学習指導と生活指導の改善に重点を置いてきたが、生徒の実態を考慮して「健康・体力づくり」の指導も充実させる必要があると考えた。そこで、教育課程編成の視点から「かながわ j o y ! j o y ! スクール健康・体力づくり実践校」に立候補をし、さらなる立て直しを図った。

(2) 実践内容

① 研究活動

<健康づくり部門>

- ・各教科、特別活動を通して健康・体力の向上維持のための学習実施
- ・養護教諭を中心として保健指導の充実を図る
- ・生徒・保護者を対象に講習会・講演会を実施し、健康への関心を高める機会の設定

<体力づくり部門>

- ・保健体育の授業で保健に関する知識を学びその向上維持のために必要なことを考えさせる。
- ・部活動等で、健康・体力づくりに関する学習会・講演会を実施する。また、事故への対応や応急措置の方法などの安全に関する学習も実施

<JOY! JOY! PR部門>

- ・生活習慣アンケートを実施して生徒の生活の実態を把握し、分析。その結果を全校生徒、保護者に知らせ、生活習慣改善への関心、意欲態度の向上を図る。
- ・「JOY! JOY! 通信」を定期的に発行する。

<その他の取り組み>

講演会「健康・体力づくり (全校生徒・保護者対象)」

講演会「学力アップとやる気の出る朝食、朝食を食べるといいことがいっぱい」

② 取り組みの成果と課題

全職員の努力とPTA役員を中心とする保護者の協力により、生徒の様子に確かな変化が起きてきた。朝食を食べる必要性から起床が早くなった生徒が増え、遅刻が減った。また保健室に休みに来る生徒も減り体育の見学者もほぼゼロとなった。朝食の喫食率及び給食の残量も少なくなった。

しかし、「健康づくり」「体力づくり」「生活習慣改善」部門のそれぞれが独自に指導計画を立てて実践していたため、次のような課題が残った。

- 3つを関連付けて学習する指導計画ができない。
- 「生徒自ら課題を見つけて取り組む」という本来の目的を達成できていない。
- 学級活動の時間で行っており総授業数を確保することが難しい。

これらの課題を克服するため25年度に「健康体力づくり指導の取り組み予定」を見直した。保健体育科や技術・家庭科の学習内容も関連付けて横断的・総合的な学習活動を設定した。そして、「輝いている私」をテーマに総合的な学習の時間の1単元として設定し、自らの健康・体力に関する課題を見つけ、問題の解決や探究活動に主体的に取り組む学習活動を展開している。

2 協議内容（提案1の協議、テーマに即した協議）

Q 何が学校を大きく変えたと現場の職員はとらえているのか。また、4つの小学校との連携どのように取り組んだのか？

A 連携し、小学校の職員にも頑張ってもらった。例「高学年ルール」を作っていただいた。

子供が「学校が楽しい！」と感じると保護者は学校がよくなったと感じる。通信等で学校の取り組みや状況を数多く情報発信した。

Q 通信で発信、どのようなお願いをしたのか？便りを見てもらうための工夫は？

A 教師の取組により、学校の姿勢がどんどん伝わっていった。通信番号を入れたり、保護者が来る機会（参観日等）に通信を教室等に掲示したりした。生徒伝い、保護者伝いに内容は伝わった。

Q 養護教諭のかかわり、保健室の機能をどのようにしたのか？

A 養護教諭が生徒のことをよく知っていた。（学区の小学校から移動してきた）生徒と話をすることが第一。名前を早く覚え知ることにより生徒に合った指導ができた。生徒との距離が縮まったことによりコミュニケーションが深まった。

Q 生活改善に効果のある手だては？

A 学校がよくなっていった大きな原因は分からないが、「私たちはあなたたちのことを心配している。」ということが伝わったのではないか。一番大きなことは朝食を食べるようになったこと。手だての中で一番大きいのは、朝食アンケートが大きかった。保護者・生徒の刺激になった。

3 まとめ

「明日は我が身」という気持ちで、発表をとらえて欲しい。学校の落ち着きを取り戻すための生徒指導は大変なことである。その時のための貴重な提案であるので、参考にしたい。

生徒が学校に対してどう評価しているかが一番大事である。生徒からの信頼感があれば、保護者の信頼はあとからついてくる。小中の職員、保護者、生徒の困り感が一致したので小中連携がうまくできてきた。

南下浦中は規則正しい生活習慣、朝食を切り口にしたが、横須賀の他の中学は学力向上で取り組んだ。家庭学習をするために生活習慣が整えられたことにより、結果として学習環境や学習に対する取り組み姿勢がよくなったと考えてよい。

キラキラシートに取り組んだことにより自己分析ができるようになってきた。生徒の主体性が湧き出てくる。子どもの自主性を育てるためにどのような手だてが取るのが大切である。

提案2

提案者 赤峰 準（横浜地区）

<研究主題> 「カリキュラムマネジメントを推進する学校経営の在り方」
横浜市学力・学習状況調査を学校経営に生かす取組

1 提案内容

(1) はじめに

これまで横浜型小中一貫教育を推進し、「横浜版学習指導要領」に基づくカリキュラムマネジメントの充実によって、確かな学力の育成を目指してきた。今年度は確かな学力の育成を図るための学校経営の在り方の研究を進めている。特に、全小・中学校で実施している「横浜市学力・学習状況調査」を活用し、学校としてとらえた課題解決に向けた方策を教育課程に生かす取組として考えていく。

(2) 横浜市学力・学習状況調査について

市立学校における児童生徒の学習状況について分析的・総合的に把握することで、教科指導や学習評価の工夫改善、教育施策に生かすとともに、児童生徒の学力向上のための学習改善に生かす。学習指導要領で示された「思考力・判断力・表現力等」の育成の理念を踏まえ、平成22年度から活用問題を設定した。調査結果は教育委員会、学校、児童生徒、保護者、それぞれの立場で活用できる。

また、教科の調査問題を始め、生活・学習意識調査、学校質問紙調査の調査結果を集約し、分析チャートCDを配布している。

(3) 横浜市学力・学習状況調査分析チャートの活用

① データ分析から学校経営への活用

小中教育推進ブロック内で共有し、活用する。

② 横浜型小中一貫教育推進に活用

各校の課題を検証する→分析を深める→共通の課題を確認する。

子どもたちの実態からどこに課題があるかをとらえ、カリキュラムの課題を発見する。

- ③ 横浜市学力・学習状況調査戦略会議を行い学力向上の具体策を練る。
学習状況調査の結果に基づく学力向上のために戦略会議を実施。

(4) 教育課程に生かす学校経営の方策（取組例）

- ① ユニバーサルデザインの考え方を教育課程に生かす取組

学級のすべての子どもにとってわかりやすい授業、基礎的・基本的な知識・技能の習得のために、授業のユニバーサルデザイン化（特別支援教育の視点を生かした授業づくり）を図る。

ア 環境の工夫

必要のない刺激を軽減し、学習に集中できるようにする。

イ ルールの明確化

ルールや手順を明確にし、その場の状況判断が苦手な児童生徒でも安心して学習に臨めるようになる。

ウ 視覚的支援の工夫

エ 発問や説明の工夫

オ 認め合う場の設定

- ② 「横浜の時間」、クロスカリキュラムの考え方を教育課程に生かす取組

総合的な学習の時間と各教科等の学習の関連を図る。

2 協議内容

Q：授業のユニバーサルデザイン化について

①小・中学校連携で進めるとなると難しく、方法等バラバラになってしまうのではないか。

②ユニバーサルデザインで統一することは、教師の個性と相反する場合もあるのではないか。

A：①子ども一人ひとりにとってあると便利な支援という観点で、担当者が納得できる形で進めているが、連携の在り方などこれからの課題である。

②授業のユニバーサルデザイン化については、授業についていくことのできない子どもに対しての授業改善と考えている。

Q：①学習状況調査の調査結果の活用について教育委員会も見るということは、個人情報や、学校間格差、学校間の序列という問題があるのではないか。

②戦略会議の担当者はだれなのか。

③学習状況調査はどのような時間を使って実施しているのか。

A：①結果を学校間の序列としてとらえていない。横浜市の平均値に達していないなど、児童生徒の課題や実態が見えてくる。それをどう分析しフィードバックしていくか、実態に即した学習指導に生かしている。

②教務主任が中心になっていることが多い。

③1015時間の各教科の時間の中で調査を実施している。

3 まとめ

今回の提案は、カリキュラムマネジメントを推進していくことを通して確かな学力の育成を図るものであり、実態把握から具体的な改善策へ生かしていくためPDCAサイクルを生かし、どのように調査を有効活用していくかというものであった。その実態把握のツールが学習状況調査である。その実態を受けて、授業のユニバーサルデザイン化、クロスカリキュラムが上げられている。

授業のユニバーサルデザイン化は、学級のすべての子どもにとってわかりやすい授業づくりとして取組が進められている。また、クロスカリキュラムの考え方を教育課程に生かす取組は、総合的な学習の時間を核にしながら、各教科で培われた力と「横浜の時間」が相互に響き合いながら思考・判断・表現力等の育成を図るよう実践されている。ESD（持続発展教育）の視点も、今後クローズアップされてくるであろう。

カリキュラムマネジメントでは、PDCAサイクルにより、編成した教育課程の実態を把握し、具体的な改善策を見いだしていくことが必要である。校内の組織的な取組として、評価についてもいかに学校の組織を機能させていくか、また小・中が連携して地域を取り込んで、地域ごとPDCAサイクルを回していけるかが今後の課題である。

班別協議

Aグループ

授業研究について

- ・異なる教科でグループ編成をした授業研究が効果的である。
- ・公開授業の後、授業に参加していた生徒・保護者へのインタビューも効果的である。

保護者への通知

- ・安心安全メールで配信する際に、通知が配布された件も載せている。

Bグループ

- ・学校全体の職員集団がまとまることが大切。
- ・校務分掌を改善することで、子どもたちに関わる時間ができる。授業研究の時間ができる。
- ・課題は、研修の進め方。時間の設定や、若い教師へのアドバイスができる職員集団をつくる。

Cグループ

ユニバーサルデザインについて

- ・職員の意識を変えることが一番大変で、生徒が見通しを持てることが一番大切。
- ・教師が生徒に見通しをもたせるために、授業の組み立てを考えることが授業力向上につながる。

小中連携について

- ・小中連携の中で情報交換はしているが、学力向上までの話までは進んでいない
- ・授業が担任中心の小学校に比べ、中学校でクロスカリキュラムを進めることは難しい面がある。

学習について

- ・学力下位層を底上げしていく手立てをどうするか。
- ・学力上位層の生徒への手立てがなかなか進んでいない。

Dグループ

- ・職員の異動が多いため学校の校務の引き継ぎが大変である。
- ・子どもたちのよいところをほめることで、教師と子ども・親がつながっていく。
- ・朝食をとることで授業を昼までがんばれる生徒が多くなった。
- ・提案2については、学習状況調査の結果の活用が難しい。生徒がどのように変容したかわかる資料があるとよかった。

Eグループ

- ・指導力の向上と、若手教師の指導力アップのため研究授業を実施。
- ・学力状況調査をどのように活用していくかが課題である。
- ・下位層の底上げには、基本的な生活習慣の確立は重要である。
- ・キラキラシートは、自分になりたいイメージを生徒に持たせるという点で有効。
- ・最終的には、教師の人間力の向上が求められる。

Fグループ

- ・生活習慣の改善が学力向上につながる。そのために保護者との連携が大切である。
- ・有名人の講演も保護者啓発のためには効果的であった。
- ・他教科の授業を参観することは、ユニバーサルデザインの観点からも効果的である。

まとめ

○文部科学省初等中等教育局教育課程企画室長（総則部会資料参照）

- ・全国的な課題 ①学習状況調査の結果の活用の仕方

②見直し振り返りの学習の定着や指導方法・指導体制の改善等の取り組みが大事

○道徳の教科化等、文科省で検討中

○土曜授業状況→全国的には取組みを進めているところもある。

文部科学省は、「土曜日を有効利用していない子供たちがいる」という課題意識から市町村で実施しやすい環境整備に取り組む方向。「授業時数の確保」のためではない。

○今日、提案のあった趣旨を各地区に帰りしっかり伝達してほしい。